

Sunny Memories of Foreign Lands より

スコットランド旅行を中心に

—ストウの反奴隷制と博愛の精神、子ども教育への情熱—

三 上 節 子

前書き

ハリエット・ビーチャー・ストウ(Harriet Beecher Stowe (1811-1896) (以後、ストウとする))によって *Uncle Tom's Cabin, or Life among the Lowly* が 1851 年 6 月から翌年 4 月まで週刊誌 *The National Era* に連載され、3 月には本として John P. Jewett & Company から出版された。また出版 1 年目でアメリカで 30 万部、イギリスでは 100 万部売れ、その後も国内外で長期にわたりベストセラーとなったが、特にイギリスでは反奴隷制運動家や一般民衆の意識が高くアメリカの奴隷制度に対する強い反対の意思表示や、黒人奴隷たちへの同情心が国中を席卷した。そのために 1853 年 4 月から 9 月までイギリス、フランス、スイス、ドイツなどの反奴隷制協会 (the Antislavery Society) から招待を受け、現地で反奴隷制運動をしている人々と家庭や教会、公会堂で交流したり、沿道で歓迎する民衆に直接出会ったり、歴史遺産の異文化体験などをした。この旅行には夫 (Calvin Ellis Stowe)、長兄 (Charles Beecher) が同行し、講演会では当時女性は壇上や席上で演説する習慣がなかったので、夫、兄が行ったが、ストウは招待先の市長や市長夫人、有力者夫人などと会話を楽しみ、見物、散歩等にてかけている。

この小論ではストウが長兄の日記を基に書き下ろした『外国での晴れやかな思い出』(*Sunny Memories of Foreign Lands*, 2 vols. 1854) (以後、*Sunny Memories* とする) に記された、イングランド、スコットランド、ドイツ、フランス、

スイスなどでの出来事のうち、リバプール、グラスゴー、エディンバラ、アバディーンに焦点を当て、筆者が昨年(2014年)2月に訪ねたスコットランドの上記3市の見聞の印象も交えながら、ストウの異文化体験、反奴隷制観、地域住民・子どもたちに寄せる思いなどに見えるストウの立ち位置、思想の深層に迫ってみたいと思う。¹

第1章 リバプールにて (Liverpool, April 10-13)

ストウ一行を乗せた船、ナイアガラ号 (the Niagara) がリバプール近くの燈台のあるキンセール岬 (the Kinsale point) を通り過ぎたとき、ストウは11歳の子どもであった時、長姉キャサリン・ビーチャーの婚約者フィッシャー教授の乗った船、アルビオン号(the Albion)が大嵐のなかで難破し不帰の客となった大事故の悲しみを思い出した。² ストウは船旅の危険、船に携わる仕事の人がいいつも危険と背中合わせであること、そそり立つ岩山という無慈悲な自然を前にして人間の無力を厳粛に受けとめている。

What an infinite deal of misery results from man's helplessness and ignorance and nature's inflexibility in this one matter of crossing the ocean ! What agonies of prayer there were during all the long hours that this ship was driving straight on to these fatal rocks, all to no purpose ! It struck and crushed just the same. Surely, without the revelation of God in Jesus, who could believe in the divine goodness ? I do not wonder the old Greeks so often spoke of their gods as cruel, and believed the universe was governed by a remorseless and inexorable fate. Who would come to any other conclusion, except from the pages of the Bible ? (p. 16)

リバプールではイギリスで最も有名な奴隷制廃止運動家の一人、クロッパ

¹ 段落後の()頁、および引用英文後の()頁は*Sunny Memories* のテキスト頁を示す。

本文中の()内の英語は一部の人名・書名以外はすべて *Sunny Memories* 内の語句である。

² 船の難破は1822年4月22日のこと。Charles Edward Stowe, *The Life of Harriet Beecher Stowe, Compiled from Her Letters and Journals* (London: Sampson Low, Marston, Searle & Rivington, Limited, 1889), p. 24.

一氏 (Mr. Cropper) の子息が馬車で出迎えに来てくれ街の中心街、マーシー川沿いの別荘に案内された。ストウはイギリスという国との初対面に際して、自らがアメリカ人、特にニューイングランド人として始祖の母国であり、始祖の魂の源流である国に特別な感情を抱いている。また、親根から離れて新しい土壌で独自の成長も見せているとして、二国の違いにも度々言及する。本論ではストウが主にリバプールで感じた二国の違いを4つ述べておきたい。

まず第1に、イギリス人の色白さ、澄んだ顔立ち、明るい目、心身の健康さ、元気さである。特に子どもたちがアメリカの子どもたちより健康そうに見えたことである。この点にストウは本書で度々言及するが、当時イギリスの児童に対する福祉制度がアメリカより発達していたためではないだろうか。

I must say, so far as I have seen them, English children have a much healthier appearance than those of America. By the side of their bright bloom ours look pale and faded. (p. 27)

第2に、イギリス国民のもてなしの業はよく研究され成熟していて世界一と言えるのではないかとやっている。というのはストウ一行に、外は整った垣根、庭木、芝生を、室内も調度品、石炭の暖炉、生け花、書籍だの、沸騰しているお湯とお茶、愛情溢れる励ましの手紙などを備えた別荘を用意してくれたり、3、40人を会しての朝食のティーパーティーも家族的雰囲気醸し出されていてストウは非常に驚き感激するのである。王国として長い歴史を持ち、七つの海を制した国にしてできる伝統であろうか。

The hospitality of England has become famous in the world, and, I think, with reason. I doubt not there is just as much hospitable feeling in other countries; but in England the matter of coziness and home comfort has been so studied, and matured, and reduced to system, that they really have it in their power to effect more, towards making their guests comfortable, than perhaps any other people. (p. 20)

第3に、イギリスの生け垣にはよく手入れされたものとそうでないものがあるが、いずれにしるアメリカの場合隣との境界線が石や金網であるのに対して、イギリスはすべて生け垣であるのは素晴らしいと思うとストウは言う。

またアメリカには庭を美しく保ってくれる庭師がいなくなったと嘆いている。真偽の程は筆者にはわかりかねるが、ストウの関心事に庭の整然とした美しさがあつたことは確かである。ストウはリバプール、ほか各地で彼女の一行が車で通ると、通りの家々は門を開けはなっておいてくれた。ストウはこれがイギリスの歓迎の習慣だと思ふとし、それらの家主に大いに感謝したいと言っている。

We cannot get the gardeners who are qualified to do it; and if we could, the painstaking, slow way of proceeding, and the habit of creeping thoroughness, which are necessary to accomplish such results, die out in America. Nevertheless, such grounds are exceedingly beautiful to look upon, and I was much obliged to the owners of these places for keeping their gates hospitably open, as seems to be the custom here. (p.33)

第4にイギリスの召使たちの階級的、知的、資質のレベルがアメリカより高いことである。反奴隷制運動家のクロッパー氏に仕える召使たちは全員『アンクル・トムの小屋』を読んでいて、その本に全面的に共感してくれたのだ。彼らは知的であり、身なりもきちんとしているし、礼儀正しさも断然アメリカの召使たちより敬意に満ちている。そこには自尊心と従順さから醸し出される上品さがあるのだ。アメリカよりイギリスの誰ものマナーが敬意に満ちているとストウは言う。古き良き習慣を忘れた「金びか時代」のアメリカと比べて、奴隷制をきっぱり廃止し、福祉に力を入れているイギリスの底力はこういった素朴な庶民の忍耐強さ、従順さ、礼儀正しさにもあるのではないかとストウは思っている。それはストウの母国を愛するがゆえの冷静な母国認識と見られないだろうか。ストウは『オールドタウンの人々』(*The Oldtown Folks*, 1869) でも古き良きアメリカへの復古を唱える場面があると通底する。

Generally speaking, the servants seem to me quite a superior class to what are employed in that capacity with us. They look very intelligent, are dressed with great neatness, and though their manners are very much more deferential than those of servants in our country, it appears to be a difference arising quite as much from

self-respect and a sense of propriety as from servility. Every body's manners are more deferential in England than in America. (pp. 37-8)

いよいよ反奴隷制協会の集いでの演説、話題について紹介したい。まず、ボンネットをかぶった夫人たちを伴っての反奴隷制協会の家庭的雰囲気の朝食会の模様を述べよう。リバプールはイギリスの海外貿易の最大の窓口であり、三角貿易においてイギリスで初めて奴隷貿易を採用した都市でもあったので、トマス・クラークソン (Thomas Clarkson, 1760-1846) がリバプールで反奴隷制運動を起こしたときは大迫害に遭ったのだが、彼の最初の支持者であり今回の招待者の父親クロッパー氏、最高裁判所長官デンマン (Lord Chief Justice Thomas Denman, 1779-1854)、マックニール牧師 (Rev. Dr. McNeil) などの尽力により、多くの奴隷制廃止論者を得て奴隷貿易禁止令が下されたのが1807年、イギリス全植民地で奴隷制度が廃止されたのが1833年である。朝食会で彼らが述べた論旨は以下の通りである。

(1) イギリスの方がアメリカよりも『アンクル・トムの小屋』の売上げ数が多かった背景に元宗主国イギリスにとって、新興国アメリカが元宗主国を凌ぐ勢いで経済発展をしている陰に非人道的制度が残存していることへの優越感があったらしいという背景を踏まえてのことなのか、ストウはそのことで手厳しい非難を浴びせられることを覚悟した。しかしそういう非難はなく、むしろ「奴隷制度をアメリカに植え付けたのはイギリスである」として自国にこそ責任があると厳粛に受けとめていることにストウは「嬉しい誤算」(most agreeably disappointed) として胸をなで下ろすのであった。(pp. 24-5)

(2) マックニール牧師の質問「アメリカ南部には奴隷制度を擁護している本当のキリスト教徒はいるのですか」にストウは、「疑いもなく、柔和なキリスト教徒で奴隷制擁護者はいます。どんな暴政にも擁護する人が何人かいるように」、また「善良な人間に奴隷制の存在を容認させるのもっともらしい理由に、その制度には優秀な種族が劣った種族を保護養育し、キリスト教的教育を授けるという目的があるため、というのがあります」と答え、さらに長老派教会やさまざまな教派の教会が黒人に宗教教育を施していると述べつつ、しかし「教育を施しているという点にだけに目を奪われて、奴隷たちに忍従

を強いる罪と不正を犯しているという認識がないということは問題である」と答える。ストウは、出席者たちが、現状を厳しく認識しないで奇妙な論理にそそのかされて奴隷制を続けているアメリカのキリスト教徒たちの状況を優しく受けとめながらも、その制度を擁護することでキリスト教に不名誉をもたらしていることに非常に深刻な懸念を示していると述べている。

*I then stated that the most plausible view, and that which seemed to have the most force with good men, was one which represented the institution of slavery as a sort of wardship or guardian relation, by which an inferior race were brought under the watch and care of a superior race to be instructed in Christianity. (pp. 25-6)

*I remarked that many good people who do not take very extended views, fixing their attention chiefly on the efforts which they are making for the religious instruction of slaves, are blind to the sin and injustice of allowing their legal position to remain what it is. (p. 26)

*Every person present appeared to be in that softened and charitable frame of mind which disposed them to make every allowance for the situation of Christians so peculiarly tempted, while, at the same time, there was the most earnest concern, in view of the dishonor brought upon Christianity by the defence of such a system. (p. 26)

(3) 朝食の後で、貧しい子どもたちの通う学校の子どもたちが大勢廊下に並んで歓迎してくれた。彼らは貧しい身なりだがござっぱりと清潔な格好をしており、何よりも紅潮した健康そうなほお、輝く目をしていて、来会していた一人が「この子どもたちは売り買いされない国に生まれたのだ」と子どもたちを祝福したことで、ストウはイギリスで奴隷制度が根絶されるに多くの労苦があったことを思い起こしながら、アメリカにもいつの日か奴隷制廃止の日が来ることを信じた。(pp.27-8)

(4) 多くの会合で語るのは夫ストウ氏であり、時にはストウの信書を朗読することもあった。その晩の反奴隷制協会の会合でストウ氏は、奴隷労働によって作られた製品を購入、輸入することが奴隷制を支持することにつながるので考慮してほしいと語ると、綿製造や輸入に携わる紳士たちからイギリスの綿産業が奴隷制度を温存させる重要要素なので正しい判断を出したいと語

った。(p.37)

(5) 翌日はリバプールを後にする前に、イギリスで最初に生まれた反奴隷制運動の団体である黒人フレンド教会の女性たちの集会に出る約束があったのでクロッパ夫妻に案内してもらった。その途中で、カトリック教徒の博愛主義者 (philanthropist) のチショルム夫人のことが話題になった。彼女は移民者の福祉に貢献している人でイギリスのあらゆる階級の人々に影響を与えているとのことであった。イギリスでは多くが英国国教会員なので最初善良な人々ですら彼女がカトリック教徒だということで躊躇する場面があったそうだが、ストウ夫妻とクロッパ夫妻は「今日人権擁護という偉大な目的 (the great humanities of the present day) のためにはあらゆる教派、会派が融和して目的を遂げなければならない、また誤った考え方と思われるものの伝播を恐れるのであれば移民者専用船に聖書をもっとたくさん供給しさえすればいいのだということで合意した。聖書を移民者にたくさん供給するという考え方は当時はキリスト教が大きな勢力を持っていた時代なので彼らのように博愛主義者と言えども宗教はキリスト教がいいという考え方が根本にはあったと言えよう。(p.38)

また、興味深いのは反奴隷制協会の朝食会に国教徒(the established church) 即ち、英国国教会に属する者以外に、バプテスト派やフレンド派など非国教徒の人々も同席して友好的に議論していたことにストウは驚いている。ストウは双方は社会的に交流していないとアメリカで聞いていたからである。彼女はアメリカでもそういう融和がそのうち起こるのではないかと希望を託している。そのようにストウは信条を越えて博愛のため、人権擁護のために活動しなければならないとこの書でしばしば述べている。それが、イギリスではアメリカより進んでいることに、ストウはアメリカが学ぶべきだと思ったに違いない。そのように、ストウはイギリスの美点をよく捉えている。(p. 27)

(6) フレンド派の黒人女性たちによる集会で彼女たちは、イギリスが奴隷制度の悪をそもそも文明国に最初に植え付けてしまった事実とその結果としての責任を深く強く思い起こしながら、キリスト教国としてその悪が自国ばかりでなく世界のすべての国からなくなるまで努力の手綱をゆるめないと語った。その集会では奴隷たちの利益のために用いるようにと多くの寄付が献

げられた。イギリス、スコットランドをはじめ欧州各地で献げられた多くの寄付金はアメリカの奴隷解放運動推進のために用いられた。リバプールを去る車の傍にはたくさんの友人が見送りに詰めかけてくれたほか、奴隷制廃止への思いを伝えたいと元国会議員の病弱な老紳士から熱いメッセージ付きの美しい花束も届いた。(pp. 38-9)

The meeting was a very interesting one. The style of feeling expressed in all the remarks was tempered by a deep and earnest remembrance of the share which England originally had in planting the evil of slavery in the civilized world, and her consequent obligation, as a Christian nation, now not to cease her efforts until the evil is extirpated, not merely from her own soil, but from all lands... They presented us with a sum to be appropriated for the benefit of the slave, in any way we might think proper.

A great number of friends accompanied us to the cars, and a beautiful bouquet of flowers was sent, with a very affecting message from a sick gentleman, who, from the retirement of his chamber, felt a desire to testify his sympathy. (pp.38-9)

第2章 グラスゴーにて (Glasgow, April 14–17, 25)

ここからスコットランドへの旅が始まる。ストウの読書歴の中にサー・ウォルター・スコット (Sir Walter Scott, 1771-1832) の占める位置は高い。有名な話だが『ハリエット・ピーチャー・ストウの生涯』によると、ストウが11歳の頃であるが、長姉キャサリンの婚約者フィッシャー博士の遺品の書籍がピーチャー家に届いた時、そのなかに『スコット全集』があったそうである。ストウの父親 (Rev. Dr. Lyman Beecher, 1775-1863) は『アイヴァンホー』 (*Ivanhoe*, 1819) を抱えながら2階から下りてきて子どもたちに、「私は子どもたちに小説は読んではいけなくて来たが、スコットの本だけは読まなければいけないよ」 (It was an epoch in the family history when Doctor Beecher came down-stairs one day with a copy of “Ivanhoe” in his hand, and said: “I have always said that my children should not read novels, but they must read these.”)³

³ *Ibid.*, p. 25.

と語り、スコットの小説の文学性、道徳性を高く評価した。それに勢いを得たピーチャー家の子どもたちは全員スコットを読みあさり、スコットファンになり、家族の催し物の時にはスコットの作品を暗唱したり、演じたりしたと言う。ピーチャー家の両親、⁴子どもたち、また夫ストウ氏も読書好きでスコットの読破を手始めに、イギリス文学、そしてヨーロッパの文学・人文科学書を渉猟していたようである。特にストウのイギリスの文学と歴史への造詣の深さ、その読書量の多さがこの *Sunny Memories* では面目躍如たるものがある。というのは、グラスゴーからの旅行記にはスコット、ロバート・バーンズ (Robert Burns, 1759-96)、スコットランドの民話、民謡などが各ページを埋め尽くすのである。また、スコットランド方言も多用している。

A country dear to us by the memory of the dead and of the living; a country whose history and literature, interesting enough of itself, has become to us still more so, because the reading and learning of it formed part of our communion for many a social hour, with friends long parted from earth.

The views of Scotland, which lay on my mother's table, even while I was a little child, and in poring over which I spent so many happy, dreamy hours, —the Scotch ballads, which were the delight of our evening fireside, and which seemed almost to melt the soul out of me, before I was old enough to understand their words, —the songs of Burns, which had been a household treasure among us, —the enchantments of Scott, —all these dimly returned upon me. It was the result of them all which I felt in nerve and brain. (p. 41)

リバプールからグラスゴーには列車で行っている。イギリスの当時の列車はすべて1等車だけであったようだ。ストウたちは望んだわけではなかったがストウ一行(ストウ夫妻と夫人の兄のほか、イギリス人の随行者が3人いたのか)だけで6人用個室を占めてしまうので現地の人と話す機会が与えられないまま、外国旅行の新鮮さもなく、現地の情報も全然入手できないと不満

⁴ ストウが5歳の時病死した母親ロクサナ・ピーチャーも文学好きで、イギリスの作家マリア・エッジワースの子ども向け物語シリーズ“Frank” storiesを子どもたちに読んであげるなどしていた。Joan D. Hedrick, *Harriet Beecher Stowe, a Life* (New York: Oxford University Press), p. 70.

を洩らしている。ちなみにアメリカでは1等車はもっと豪華で高価であり、2等車はクッションもなく小汚いが、普通車はその中間でどの階級の人も乗れて民主的平等感があると言う。とまれ、ストウたちは現地に詳しい人が傍で説明してくれなくても十分有意義にスコットランドのことが語り合えたのではなかろうかと考えられる。(pp. 42-3)

彼らはランカシャー (Lancashire) を通り抜け、ローマ時代からの要塞でありメアリー女王がスコットランドから逃げた時に初めて立ち寄った城のあるカーライル (Carlisle) では一次休憩し、自由結婚が認められたグレットナ・グリーン村 (Gretna Green) を過ぎると、そこからスコットランドが始まった。ストウたちはスコットランド民謡、”Auld Lang Syne,” “Scots wha ha’,” “Bonnie Doon,” “Dundee,” “Elgin,” “Martyrs” などを口ずさみ、「ウォルター・スコットが生きているといいのに！」と言いあった。外はもう薄暗くなっていたが、ロッカビー (Lockerby) 駅で列車が止まると、大勢の男女、子どもがストウたちのいる窓に視線を寄せたので、ストウは窓に寄り、一人一人と握手をしながら、“Ye’re welcome to Scotland!” とか “Gude night!” の言葉を受けた。停車する駅ごとに同様な歓迎を受けて、スコットランドの人たちの良心と自分たちは一つに溶け合ったといった地球家族的な思いを持ち、ストウは非常に感動している。この時代にすでに「世界は一つにならなければ」といった現代に通ずる世界観が始まっていたのであろうか。

Who the good souls were that were thus watching for us through the night, I am sure I do not know ; but that they were of the “one blood,” which unites all the families of the earth, I felt. (pp. 49-50)

ストウ一行は夜グラスゴーに近づいた時、向こうの山高く、山火事のように赤く燃える煙と火を見て、山火事かと驚くシーンがある。これが、何棟もの製鉄所からの煙であったのだ。彼らは街の中心地、アーガイル通りの心地よい宿舎に落ち着いたとある。筆者はグラスゴーではグラスゴーセントラル駅、クライド川、グラスゴー大聖堂、聖マンゴー宗教博物館、ケルヴィングローヴ美術館・博物館、グラスゴー大学を見学したのだが、セントラル駅の通りにアーガイル通り (The Argyle Street) の表示があった。これはストウ一行が第1回イギリス旅行の時にロンドンの大きな集会で出会い、第2回イギリ

ス旅行ではストウと子どもたち3人と姉メアリーをスコットランドのインヴェラリー居城 (Inverary Castle) に招いてくれたスコットランドの古くから続く由緒ある貴族、アーガイル公爵夫妻 (Duke & Duchess of Argyll) の先祖にちなんだ名称



Argyle Street

であろうと思われる。⁵ストウたちもここを通ったであろうと思うと感無量であった。また、その通りはストウの頃から建っていたであろう、今は使われていない塗料の剥げた大きな劇場風の建物やホテルがあった。

そして、当時は街の中心地であったとされるが、現在は街外れの静かな丘と思われる所に、12世紀に建築されたという大型でどっしりと落ち着いた茶色のグラスゴー大聖堂があった。遠く前方の山 (通称、Glasgow Necropolis) の上には、スコットランド宗教改革の指導者ジョン・ノックス (John Knox, 1514-72) の像が立っていた。ここでグラスゴー大聖堂についてのストウの言説に注目したい。

ストウは到着2日目の午後、市長(スコットランドでは lord provost と言う)の案内でグラスゴー大聖堂に行く。ストウを見ようと市民がぎっしり集まっていた。聖堂の正面入口の広い



John Knox

⁵ Charles Edward Stowe, *op. cit.*, pp. 229-33, pp. 271-2. 「アーガイル」の綴り字は侯爵名では 'Argyll'、道路名では 'Argyle' である。

庭に2,300年前の地面とほぼ同じ高さの古くて大きい墓石が所狭しと敷き詰められていて、筆者はその歴史の古さに圧倒されたが、ストウは溪谷を挟んでもう一つの高い丘の墓地群(通称、Glasgow Necropolis)にも足を延ばしている。そこに高い台座に据えられた「右腕を空しく大聖堂に向けて戦いを挑むように振りかざし立っている」とはストウの言だが、ジョン・ノックスの立像があるのだ。

On this opposite eminence the statue of John Knox, grim and strong, stands with its arm uplifted, as if shaking his fist at the old cathedral which in life he vainly endeavored to battle down. (p.55)

ここでストウは、本音を洩らしているのだが、ルッターは肯定できるがノックスは教会堂の装飾品(accessories)と本質的な物(essentials)を同一に排除しようとした点で保守的な要素がなかったとしてあまり肯定していない。カルヴィン主義宗教改革とそれに伴う聖像破壊運動(iconoclastic crusade)のなかでスコットランドのカトリック教会堂が破壊されつつあった時、グラスゴウの商人達は会堂の中の聖像の破壊にとどめて、会堂は壊さないようにと説得した。そのお陰でステンドグラスがただのガラスにされたりするぐらいの被害にとどまった。ストウが訪ねたときはその傷跡がたくさん残っていたのであろう。ストウは、「大窓から差し込むまぶしい光は会堂内の欠陥や粗野さをむき出しにさせる。

それはたぶん冷徹さ、明晰さ、知性、合理性の象徴とでもいうべきものであって、暖かく豊かな人間性を育むいにしへの多色の壮麗な神秘性の場を奪ってしまった」(p. 56)と失望している。これに



グラスゴウ大聖堂

ついでだが、筆者が訪れたときは、8割程度はいわゆる中世らしいステンドグラスであったが、一部は100年前位のガラスであり、一部は簡単な幾何学模様が入った程度のシンプルな色ガラスや磨りガラスであった。聖遺物などはそのまま残っていたので、破壊は一部であったのだろう。

ストウは父親の死後、イギリス旅行から10年後ぐらいに父親が所属し活躍していた組合派教会(別名、会衆派教会)(The Congregational Church)から、母親が属していた英国国教会(日本名、聖公会)(The Anglican Church, The Episcopal Church.)に教派を替えるのだが、そこにも今述べたと同じような、教会に美しさ、暖かさ、優しさ、小さき者への愛、博愛などを求める気質が働いていたと考えられる。⁶

ストウ一行は4月15日(金)の午後は大聖堂の見学、夜は聖職者や市長はじめ名士の紳士、淑女の集まる反奴隷制協会の集会に出席した。16日(土)の午前は車でクライド川沿いを下り、13世紀に建てられた要塞、ボスウェル・カッスル(Bothwell Castle)を見学したり、河岸の花などを眺めた。夜には労働者階級(the Working Men of Glasgow)の集会に出席した。労働者の男性、女性そして子どもたちが自己尊重と趣味の良さを示す服装をして集い、何人かが素朴な言葉に情熱を込めて熱弁を奮った。50年間のイギリスの労働者たちの生活状況には多くの改善されなければならない点はあるが、「自由が許されている政府」の許の抑圧は奴隷のそれとは根本的な違いがある、彼らは自由に演説することも書くことも、結社を作ることも出来るのだとストウは言う。(pp.67-8)

One cannot read the history of the working classes in England, for the last fifty years, without feeling sensibly the difference between oppressions under a free government and slavery. (p. 68)

筆者がグラスゴー大学文書館で閲覧したマイクロフィルム版4月18日付日刊新聞『グラスゴー・ヘラルド』(The Glasgow Herald)には、労働者階級の集会の方が前日の集会より心地よい集いであったという新聞記者の感想や、ストウ氏の演説で「妻も自分も先祖は鍛冶屋やパン屋など肉体労働者であり、ア

⁶ 拙書『悲哀に根ざした愛の教育観—新渡戸稲造とハリエット・B・ストウの比較研究—』麗澤大学出版会、2008年、105-6頁。

ダムにまでさかのぼります」とユーモラスに語るくだりに聴衆から喝采があったとの記事が記されている。『グラスゴー・ヘラルド』の15日付にはリパブール、18日付にはグラスゴー、22日付にはエディンバラにおけるストウ夫人を迎えての集会の様子、演説のあらましが記されている。ストウたちの招待訪問がスコットランドにとっていかに大ニュースであったかがわかる。

さらに翌日は大勢の関係者たちとともに、クライド川からケルヴィン川の中流まで蒸気船に乗りスコットやバーンズを口ずさみながら語り合い、ケルヴィン・グローヴ (Kelvin Grove) に着いた。ケルヴィングローヴ公園とは、旅行雑誌などには1852年に完成した85エーカーの公園とあるが、当時は今ののような壮麗な美術館・博物館はなかったであろうから、川や池などのある自然公園といったところではなかっただろうか。その公園に隣接する高い丘の上にはゴシック調のグラスゴー大学がそびえているが、ストウたちはアバディーンの帰りに再びグラスゴーに立ち寄り、4月25日に100人の学生からなる大学の禁酒推進協会と反奴隷制協会の合同集会に参列している。その集会で、ストウの業績と父ライマン・ビーチャー牧師の奴隷廃止説教集にも言及して賛辞を述べた総長、学長名入りの演説が *Sunny Memories* の冒頭に他の演説とともに収録されている。ちなみにグラスゴーでの労働者階級の集会での演説はそこには収録されていない。(pp. 71-8)

The committee have had their previous convictions confirmed, and their hearts deeply affected, by your vivid and faithful delineations of slavery; and they desire to join with thousands on both sides of the Atlantic, who offer fervent thanksgiving to God for having endowed you with those rare gifts, which have qualified you for producing the noblest testimony against slavery, next to the Bible, which the world has ever received....

We bear our testimony to the mighty impulse imparted to the public mind by the extensive circulation of those memorable sermons which your honored father gave to Europe, as well as to America, more than twenty-five years ago. (pp. xxxix-xl)

第3章 エディンバラ、アバディーンにて(Edinburgh, April 20, 26 /
Aberdeen, April 21,23)

グラスゴーから列車でエディンバラに向かうのだが、途中駅リンリスゴー(Linlithgow)でスコットランド悲劇の女王、メアリー一世の生まれた宮殿(Linlithgow



エディンバラ城

Palace)、隣の教会

を見学、メアリーが逃避行中宿泊したニドリー城(Nidrie Castle)の廃墟を遠くに眺めて、エディンバラに到着。エディンバラに近づいた時、そそり立つ山の上に頑強に立つエディンバラ城と海を背に急勾配の町並みの美しさを目にし、またここが敬愛して止まないウォルター・スコットの故郷とあって、ストウはスコットの詩を口ずさまずにはいられなかった。

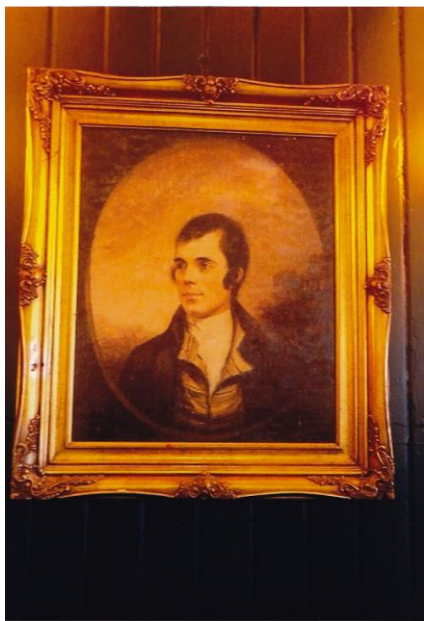
“Such dusky grandeur clothes the height,
Where the huge castle holds its state,
And all the steeps slope down,
Whose ridgy back heaves to the sky,
Piled deep and massy, close and high,
Mine own romantic town!” (p. 80)

駅には市長が出迎えてくれ、市庁舎、反奴隷制協会を案内してくれた。街中では暗褐色のドレスに鳩のように白いボンネットを付けたフレンド派の女性達が多くいて目立っていた。車にはストウ夫妻とここでの世話役であるフレンド派のウィグナム夫人(Mrs. Wigham)、そして市長が乗り込み市内見物

が始まった。エディンバラ城、大学、ホリルード宮殿 (The Palace of Holyroodhouse)、病院などを通り宿泊地に到着した。沿道ではストウの乗る車と一緒に走る元気な少年たちがいた。「ほら！この人だ、巻き毛を見ろ」などと叫んだり、ストウのさまざまな版画の似顔絵を貼ったりしているのを見て、ストウは子どもたちが表現の自由が許されている安心感から楽しみを込めて行ってくれたのであろうと考えた。彼女は抑圧と誹謗にさらされがちな「少年たち」に、彼女を歓迎するという仕方での心の中のすべての声を発散させる機会を自分が与えたのだと思うと言い尽くせない感動を思えたと記している。ストウは子どもの自由な伸びのびとして成長を願う気持ちが強い人だということがここからも分かる。(p. 81)

エディンバラでも2度集會に出席している。4月20日はどちらかという上流階級の人達の集いであり、26日には労働者階級の集會からの要請でアバディーンから引き返して出向いている。イギリスの反奴隷制協會では演説の後に、強制ではない自由募金を募るのだが、度々非常に貧しそうな人が奴隷救済のために同情の募金をしてくれることに感動の連続だった。エディンバラに近いある村で貧しい盲人の女性が『アングル・トムの小屋』の本は読めないが、息子に読んでくれたとして、募金するために貯めた小銭を献げてくれたという話を聞いて、裕福な人に優る貧しい人の同情心にストウは眠れないほど感動している。(p. 87)

スコットランドの人々の純朴さと真面目さ、また夢がある気質は地形や気候、歴史が形成したものかもしれないが、そこに住む卓越した人物からの影響もあるであろう。筆者がエディンバラ城の登り口付近にある歴史



ロバート・バーンズの肖像

を感じさせる食事をする店 (“The White Hart Inn”) に立ち寄ったところ、そこは何とエディンバラを拠点として創作活動をしていたロバート・バーンズがよく食事に来ていたパブであった。バーンズの小さな肖像画が飾っており、店の宝物だと言っていた。このようにエディンバラには世界的文学・芸術が庶民にもよく理解される土壌があるので、世界的視点から反奴隷制運動にも多くが参加したのではないかと思われた。

列車でアバディーンに向かう途中ストーンヘイブン (Stonehaven) の手前のそそり立った岬にダノッター城 (Dunottar Castle) がある。この城は16世紀半ばに大陸の宗教改革の影響を受けて、カトリック教とイングランドの支配に反発してスコットランド独自のキリスト教を確立したいとして立ち上がった信仰盟約者たち (Covenanters)⁷ 167人の大人男女と子どもたちが牢獄に閉じ込められ、罵倒、暴力、不潔、飢餓、病気のなかで死んでいったという残酷な迫害の地である。ストウはその城を車窓から眺めながら、市民的宗教的自由のために闘った人々に、スコットの文章を引用して深い同情と敬意を示し、この地を聖地として後世に残すことを提案している。スコットランドの信仰盟約者たちの受けた苦しみと、アメリカの黒人奴隷たちが受けた苦しみをストウは同一と見なして、双方に同情を寄せてこのダノッター城に言及したのであろう。

Walter Scott, who visited this place, says, “The peasantry continue to attach to the tombs of these victims an honor which they do not render to more splendid mausoleums; and when they point them out to their sons, and narrate the fate of the sufferers, usually conclude by exhorting them to be ready, should the times call for it, to resist to the death in the cause of civil and religious liberty, like their brave forefathers.”

It is well that such spots should be venerated as sacred shrines among the descendants of the Covenanters, to whom Scotland owes what she is, and all she may become. (pp. 96-7)

⁷ (スコット史) 盟約者：長老主義(Presbyterianism)の支持を盟約した人、(特に)1638年の国民盟約(National Covenant)または1643年の厳粛同盟(Solemn League and Covenant)の盟約者。『小学館ランダムハウス英和大辞典』1999年、625頁。

ストーンヘイブンを少し過ぎたウーア村という所に、地主でスウェーデンのグスタフ・アドルフ王の許でドイツと闘ったこともある傑出した軍人バークレー大佐(Colonel David Barclay of Ury,1610-86)の館が見えた。彼は、スコットランドの最初期のフレンド派信者として改宗した途端に役人や民衆から大迫害を受けたが、民衆の寵児であった頃より、現在に満足していると語り、その息子ロバート・バークレー (Robert Barclay,1648-90) はフレンド派の古典的の神学書『弁明』(*An Apology*, 1678)の著者である。ストウによると、アメリカのクエーカー詩人で奴隷制反対運動にも果敢に取り組んでいたホイットティア (Greenleaf Whittier, 1807-92) がデイヴィッド・バークレーの生き方を称賛する詩を書いているそうであるが、ストウがなぜ度々フレンド派の人々に言及するかというと、彼らがストウたちとともに、いやストウたち以上に体を張って奴隷制反対運動に取り組んでいることを知っており、彼らの崇高な生き方に共鳴と尊敬を抱いていたからであろう。(p. 97)

ディー川を (the Dee) を越えて、いよいよアバディーンに到着した。出迎えてくれたのは市長であった。市長が車で最初に案内してくれたところはフレンド派の人の家であった。軽食で一休みをしてから、会場にむかった。会場は歩けないほど人が集まっていた。さわやかな海風と社交的な明るい雰囲気にも包まれた会場でストウは若い女性たちに取り囲まれ、花束を受けたり、あちこちに飾られている花のアレンジを見て楽しんだ。ストウは今もその花束の花をいくつかドライフラワーにして保存しているとのことである。演説ではある人がスコットランド人がアメリカを愛し、同情するのはアメリカがスコットランドと同じように抑圧を正そうとしているからであると語った。募金は美しく刺繍のされた財布に入れられて手渡された。(pp. 99-100)

It is because America, like Scotland, has stood for right against oppression, that the Scotch love and sympathize with her. (p. 100)

アバディーンの町は明るい色の花崗岩で出来た家々や建物なので美しいとストウは言う。イングランドとスコットランドの教会は詩人や画家がここにあるべきというところにあり、風景の中に美しくはまっているし、教会の一つ一つに個性があるとストウは言う。ストウが見学した教会は、実は筆者も見学に行ったのであるが、アバディーン大聖堂、別名聖マイケル大聖堂 (The

Aberdeen Cathedral,
The Cathedral of St.
Machar)

である。宗教改革後に出来たスコットランド国教会は監督制を廃止したので司教座はなくなり、本来の意味での大聖堂(cathedral)とは呼ばずに、「もと大聖



St. Machar Cathedral

堂であった教会」を意味する“high kirk”を使うことが最近多くなったようである。

この教会は、6世紀から始まるのだが、12世紀頃には現在の形に近い物ができていたようだ。度々会堂が破壊され、1560年のスコットランド宗教改革でカトリック的なものが大部破壊されたとされるが、天井が木製の彫刻に紋章がついたパネル形式の手作り感のあるものであったりなど、筆者が見るかぎり、美しさと荘厳さは十分残っていると思われた。教会の周りには大きな墓石が大きな墓標とともにたくさんあり、この地域の歴史を全部知っているかのようにであった。

第4章 子どもの教育への情熱

ストウはエディンバラとアバディーンで取り組まれている活動に労働者階級の貧しい子どものための教育があるとして、『労働者の友』という新聞からアバディーンの情報をも *Sunny Memories* のアバディーンの章の次ぎの章「従姉妹への手紙」で紹介している。それは「職業学校」(the industrial school of Aberdeen) というもので、アメリカにも取り入れてはどうかという提案も込めて紹介するとしている。1841年にアバディーンには14歳以下の子どものうち路上で物乞いやたまたまに窃盗をして生きていた子どもが280人いたそうである。篤志家たちが子どもたちの道徳の向上のために、ニューヨークの博愛主

義者たちが空腹な子どもたちに食事を与え、何が良いことかを教える宗教的教育をしていることを知って、それを導入することにしたというものであった。

ただし、アバディーンでは4時間の勉強、5時間の労働、3回の食事提供があり、夏は朝7時から、冬は朝8時から聖書朗読、祈り、讃美歌、年齢に合わせたお話、その後、学科の授業(地理や歴史を地図、プリントを用いて、2週間に1度は歌の練習)、9時からおかゆとミルクの朝食、その後授業と労働を午後2時まで行い、2時にスープと粗挽き小麦のパン、時々ポトスープか牛頭スープ付き、3時まで体育やリクレーション、時々庭仕事、3時から4時まででは庭仕事か作業部屋で仕事、4時から7時まで国語、算数の勉強、7時におかゆとミルクの夕食、その後宗教の時間があって、8時に帰宅という朝から晩まできちんとした有意義なカリキュラムのあるものであった。食事はたっぷりの量で栄養とおいしさが考慮されていた。

土曜日は夕食の後は勉強をしないで、行儀よく過ごしたご褒美に、先生と田舎道か海辺を散歩するというのもあった。日曜日はお祈りのために朝8時半に集まり、9時に朝食、そのあと教室で礼拝、その後食事をして、もし可能ならば親と一緒に教会の午後の礼拝に行けるようにとの配慮で帰宅させる。5時からまた集まり、安息日学校 (*Sabbath school*) として聖書と信仰問答を教えた。7時に夕食、夕礼拝のあと、帰宅。この詳細から分かることはこの学校は普通の学校と違うところは食事と労働と道徳教育にたくさん時間をさいていることである。また、職業学校は学科と道徳と職業の実技教育を授けて就労に結びつけていることである。

6年間の試行のうちに子供たちが育児放棄から救われ、自己尊厳の意識と勤勉さと独立心を持って育ったことと、子どもたちの親も変わったことが上げられる。育児放棄をしているような親も、子どもたちが教師たちに可愛がられているのを知ると、子どもへの愛情を芽生えさせた。また女子のための学校を作ったところ女子の方が男子よりもっと早く教育効果を表した。この報告書によるとアバディーンにその時点で3校の「職業学校」と1846年設立の収容施設「救護院」(the Child's Asylum) が1つあるということである。救護院ではカウンセラーのような人が注意深く子どもの問題点とその原因を探り、解決に結びつけているそうである。これら施設の利用者の費用は無料であり、篤志家からの寄付だけで運営が行なわれていたと見られる。ストウは施設はまだまだ試行錯誤の中にあるが、国が子どもの教育の法律を作ることが先決

問題であると述べている。(pp.110-21)

ストウはこの学校教育の紹介に11頁を費やしている。ここでは触れなかったが、求められる教師の資質などにも深い思索を示している。ストウは16歳から結婚するまでの10年間女学校の教師であったし、55歳からフロリダ州に土地を買い、次男に一時オレンジ栽培をさせさり、黒人の人たちも行ける教会と黒人子弟のための小学校を建設している。そういう意味で彼女の子どもへの愛、子どもへの教育への情熱は人一倍大きかったのではないだろうか。

また、ついではあるが、「職業学校」の着想から思い出されるのは日本ではまず、孤児の父と言われ、1887年岡山孤児院を創設した石井十次(1865-1914)である。石井は、1836年からプリストルにたくさんの孤児院を建てて子どもたちを育てた宗教家でもあるジョージ・ミュラー(George Frederick Mueller, 1805-98)に学んだとされるが、ミュラー自身もイングランドやスコットランドで寄る辺のない子どもたちのための教育の実践をどこかで学んだのかも知れない。また、新渡戸稲造(1862-1933)も札幌で昼間学校に行けない子どもや晩学者のために1894年に無料の札幌遠友夜学校を創設した。彼も欧米からの情報や見聞でそういうモデルを見ていたのかもしれない。

最後に

この小論ではストウの『外国での晴れやかな思い出』(*Sunny Memories of Foreign Lands*)の第一巻の三分の一を取り上げるにとどまったが、その部分にもストウの立ち位置や思想の深層を示す内容が多く含まれていたことは収穫であった。

第1に奴隷制度を当時のアメリカ人が、イギリス人がどう見ていたかとその解決方法である。今日でも国内外に一発触発のような対立や力の支配がときどき見られる。そういう解決にも単なる言葉の博愛主義ではなく、この書に書かれていたようなユーモアや、休養、食事、会話、美の鑑賞、贈りもの、リクレーション、読書などによって、人と人が尊敬し、敬愛できる存在になることに解決の第一歩や二歩があるような気がするのである。

第2にストウの子ども、少年、女性、貧しい人、お年寄りなどへの愛の眼差しである。

第3にストウがこの短い旅行中に示したそこはかとなない文学、歴史、哲学、美学、宗教に対する造詣の深さと率直で愉快的人間性である。上記第1～3の養成に資するものは、やはり読書と研究、そしてそれを人のために実践してみることの三つの継続であろうと考える。人には時間、体力、能力、財力に限界と差があるのだが、できるだけそう努めることで、人生が楽しく有意義になるであろうことをこの書から学ぶことができた。

ストウの研究は日本ではまだまだこれからである。一冊一冊からの精読によって益と快を得ていきたいものである。

Select Bibliography

<Primary Source>

Stowe, Harriet Beecher. *Sunny Memories of Foreign Lands*, 2 vols. Boston: Phillips, Sampson, and Company, 1854.

<Secondary Sources>

Stowe, Charles Edward. *The Life of Harriet Beecher Stowe; Compiled from her Letters and Journals*. London: Sampson Low, Marston, Searle & Rivington, Limited, 1889.

Joan, D. Hedrick. *A life, Harriet Beecher Stowe*. New York: Oxford University Press, 1994.

Wilson, Forrest. *Crusader in Crinoline: The Life of Harriet Beecher Stowe*. Philadelphia: J.B. Lippincott, 1941.

三上節子『悲哀に根ざした愛の教育観—新渡戸稲造とハリエット・B・ストウの比較研究—』麗澤大学出版会、2008年。

『小学館ランダムハウス英和大辞典』小学館、1999年。